

看護職とボランティア活動員との協働性を築くには

—病院ボランティアに対する看護職の意識調査より—

看護部ボランティア委員会

○兵頭紀代美 辻畑博子 石川夢賀子

はじめに

ボランティア活動の先進国であるアメリカでは、病院内におけるボランティア活動も広く普及しており病院の3分の2以上はボランティア受け入れシステムをもっている¹⁾と言われる。我国においては、大阪の淀川キリスト教病院が昭和37年に、東京の聖路加国際病院が昭和41年に受け入れを始め、現在国立病院にもボランティアを受け入れている病院は増加している。当病院では、平成元年に病院ボランティアの受け入れ要項が制定され同時に看護部にボランティア委員会が組織された。10年を経た現在、他の国立大学病院と比べ導入の時期、活動内容、活動人員は一定の成果をあげているといえる。しかし、患者サービスの一層の向上が求められる今日、看護婦が日々の業務の中でボランティア活動員と良好なパートナー関係を維持しているかどうかは疑問である。そこで、今回ボランティア活動員と看護職員との協働関係を構築することを目的に看護職員にアンケート調査を実施し、若干の考察を得たので報告する。

I、研究方法

- 1、対象 当大学付属病院看護職員385名
- 2、期間 平成10年7月30日～8月7日
- 3、方法 自記式質問紙法
- 4、内容 三重大学による全国国立大学病院におけるボランティア導入アンケート調査結果²⁾より質問を抽出した。年齢、官職、今までのボランティア受け入れセクション勤務の経験（以後受け入れ経験とす）の有無で、①ボランティア導入の意味、②病院ボランティア受け入れに対する姿勢、③病院ボランティアへの関心度、④病院ボランティアに対する要望について調査した。
- 5、分析 集計にあたっては、少し思う、思うを思うとし、非常に思う、思う、あまり思わない、全く思わないの4段階評価とした。
年齢別、職種別、ボランティア受け入れ経験の有無から非常に思うと、思うをA群、あまり思わない、全く思わないをB群とし統計的手法を用い比較検討した。

II、結果

アンケート回収は385名中、376名であった。回収率は97%で、有効解答率97%であった。対象の属性は、表Iに、アンケート結果は図1～3に示す。受け入れ経験の有無では各項目において有意差はなかった。

質問1、「病院ボランティアがどのような考えで導入されているか」について

非常に思うと答えた人が一番多かった項目は“患者のニーズを補ってもらう人”の15%であり、職種別で副婦長と他の職種の間有意差があった。(p≤0.002)

反対に“ボランティア活動員の自己実現の場”“地域住民のコミュニケーションの場”を非常に思うと答えた人は2%と少なく、A、B群に差があった。

質問2、「病院ボランティアの受け入れを今以上に希望するか」について

全体の77%があまり思わない・全く思わないと答え、職種間で有意差はなかったが副婦長の86%があまり思わない・全く思わないと答えていた。

質問3、「どのような情報が知りたいか」について

“看護婦以外の職員の声”が一番多く27%であった。

質問4、「ボランティア活動員がこられて困ったことがあったか」について

非常に思うと答えたのが一番多かったのは、“来院予定が判らなかった”の14%で、次いで“ボランティアの初日のオリエンテーションに時間を要した”及び“ボランティア活動員への業務の依頼”の12%であった。特に初日のオリエンテーションについては、20代と20代以上の年齢との間で有意差があった。(p≤0.04)

Ⅲ、考察

病院ボランティアが受け持つ役割は、1) 患者に対して一人一人の患者に人間的なきめ細かいサービスを提供する役割、2) 病院に対して一病院生活を豊かにし、よりよい治療環境を作り上げる役割、3) 地域社会に対して一病院と地域社会を結びつける役割の3つがある³⁾と言われる。質問1の結果から、看護職員はボランティア活動員に対し、1) 患者に対しての役割に対する期待が高く、2) 病院に対して、3) 地域社会に対しての役割認識が低いと言える。このことから、我々はボランティア精神を尊重し、活動の主体性を理解し、活動を通じて社会的、経済的効果の面での認識を深めるように委員会活動で啓蒙していくことが課題であると考え。ボランティア受け入れが、円滑に導入されるかは、1) 職員のボランティア導入の意義や目的に対する理解度、2) 無資格者が職域を侵すのではないかとする不安、3) 日常の業務において負担になるのではないかとする心配が関与する⁴⁾と言われる。質問2の結果で、ボランティアの導入に関しては、看護職員の77%が消極的な解答を寄せている。このことは、質問4においてボランティア活動員が来られて困ったことについて、“来院予定がわからなかった”“ボランティア初日のオリエンテーションに時間を要した”の項目が多かったことから、1)～3)の特に3)についての要因が多いと考える。又、現状では病院としての受け入れ体制が充分とは言えず、個々の看護職員の度量に任されていることが、さらに負担となっているのではないかと考える。質問1において副婦長と他の職種の間有意差があり、質問2には、副婦長が導入に一番消極的であった。このことは、副婦長は日々の業務の中でボランティア活動員をコーディネートする立場が多く、密接に関わっている結果“患者のニーズを補ってもらう人”という期待度が高く逆に導入に関して、一番消極的であるということは、A、ザンダーが言っている⁵⁾ように副婦長は組織においてその責任を考える地位にあり、スタッ

フのために堅実な目標を設けた結果と考える。質問3について、病院ボランティアで知りたい情報として“看護婦以外の職員の声”が一番多かったことは、看護職員が、現在の看護部のサポートシステムだけでなく、他の職種にも広く参加を求めている結果だと考える。質問4について、ボランティア活動員が来られて困った事があったと答えた人は、全体の94%であった。特に“ボランティア初日のオリエンテーションに時間を要した”と答えた項目については、20代の看護職員と20代以上の看護職員の間で有意差があり、若い人がオリエンテーションに苦勞していることがわかった。今後早急にボランティア受け入れ時のオリエンテーションマニュアルなどを作成していくことが重要と考える。集団をある目標の基に変容させようとする場合、手段、方法を慎重に検討する事が最も重要である⁶⁾と言われている。その意味においても、今回のアンケート結果は、今後の病院ボランティアのあり方について一つの方向性を示唆する事ができたと言える。

IV、まとめ

今回の研究により、以下の結果を得た。

- ①ボランティア導入の目的、意義に関する認識は、充分と言えず、導入に関しては今以上に病院ボランティアの受け入れを望まない意見が多かった。
- ②ボランティアに関する情報として、“看護婦以外の職員の声”を求めている人が多かった。
- ③ボランティア活動員がこられて困ったと答えた人は多く、内容は“来院予定が判らなかつた”“初日のオリエンテーションに時間を要した”が多かった。
- ④ボランティア委員会活動の課題として、看護職員へのボランティアに対する啓蒙とボランティア受け入れ時の体制作りの必要性が明確になった。

<参考・引用文献>

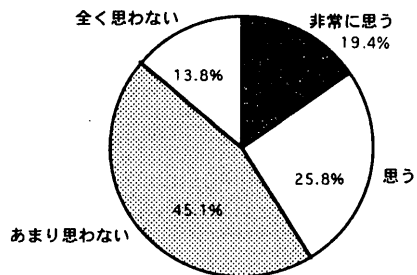
- 1) 新谷弘子：ボランティアの手びきⅡ、p14、ドメス出版、1981
- 2) 三重大学医学部：全国国立大学におけるボランティア導入アンケート調査
- 3) 内藤美登里：大学病院への提言－病院ボランティアとのパートナーシップ－
- 4) 坂井久也：病院ボランティア活用への提言 看護管理、Vol18、No9、1998、9
- 5) A. サンダー：黒川正流他訳－集団を活かす、グループダイナミックスの実践 p22、北大路書房、1996
- 6) 岡堂哲雄：集団力学入門－人間関係の理解のために－、p23、医学書院、1992

表 I 調査対象 内訳 (人)

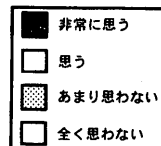
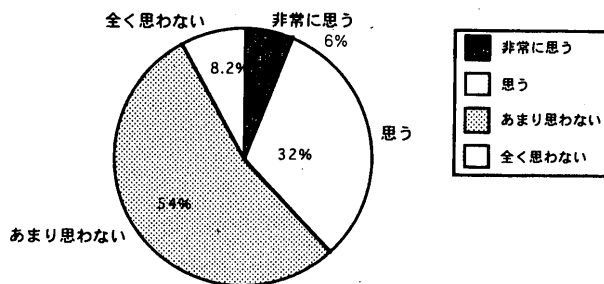
年齢別	20代	30代	40代	50代	職種別	婦長	副婦長	看護婦、士	看護、他
	122	113	81	60		25	49	284	18

1 ボランティアはどのような考えで導入されているか？

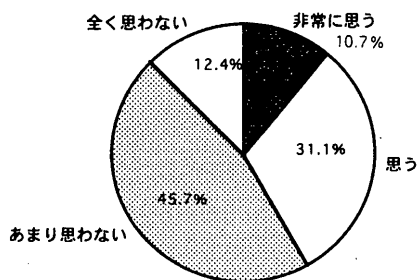
1-a, 患者のニーズを補ってもらう人



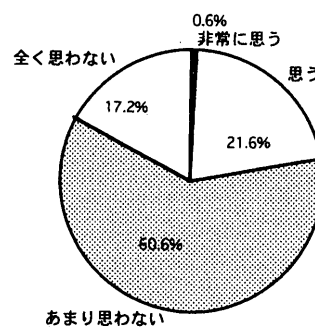
1-e, 病院作りの参画



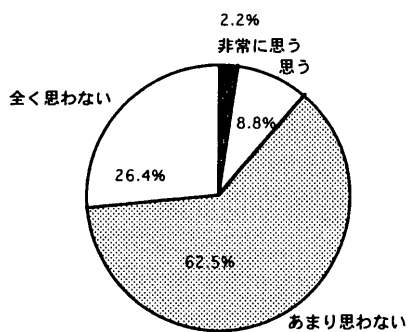
1-b, チームをくんで働くパートナー



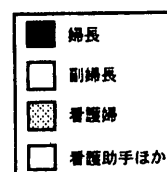
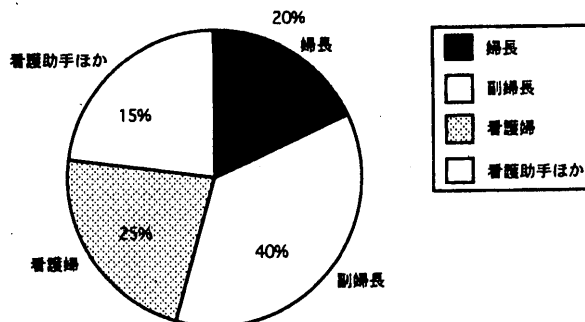
2 ボランティアを今以上に受け入れたいとおもいますか？



1-c, 自己実現の場



1-a, A群の割合



1-d, 地域住民とのコミュニケーションの場

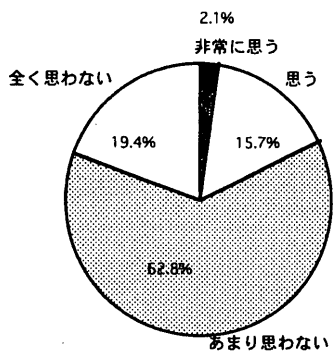
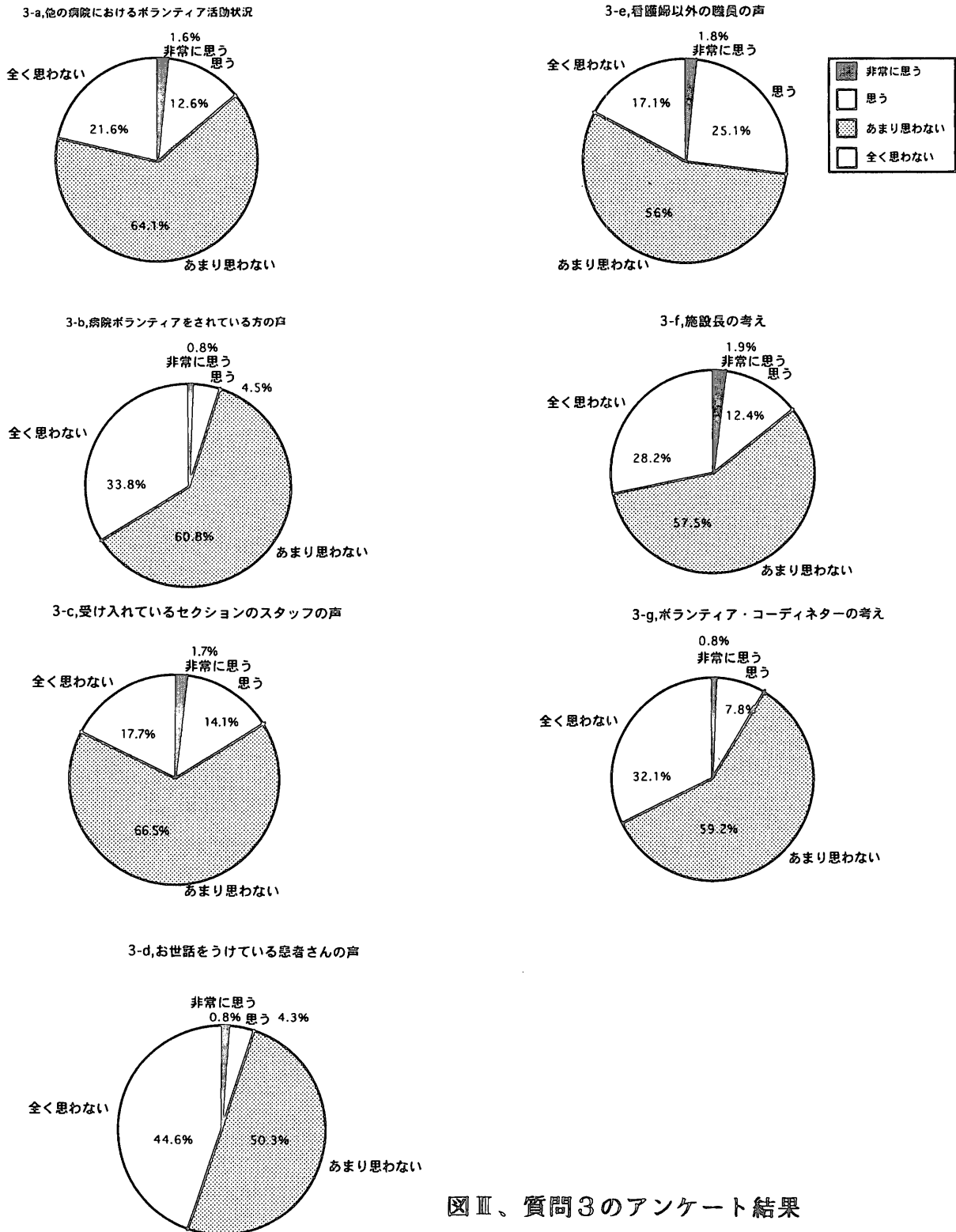


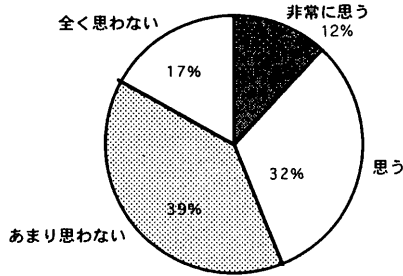
図 I、質問 1 及び質問 2 のアンケート結果

3 病院ボランティアでどのような情報が知りたいですか？

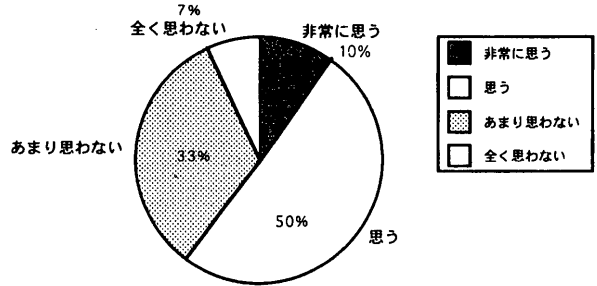


4 ボランティア活動員が来られて困ったこと

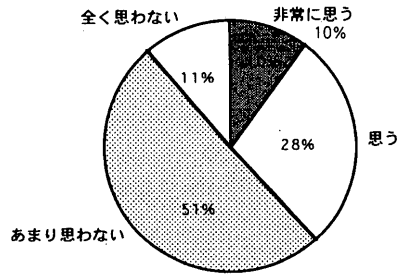
4-a,初日のオリエンテーションに時間を要した



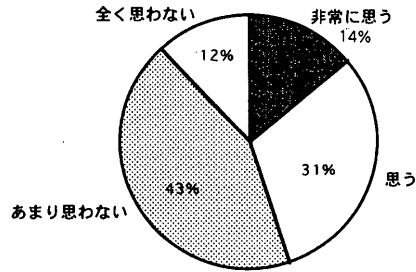
4-d,活動員に関して誰に相談すればいいかわからなかった



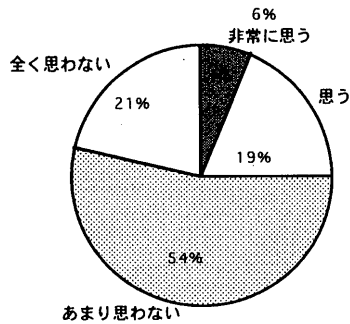
4-b,初日のオリエンテーションにどんなことをすればいいかわからなかった



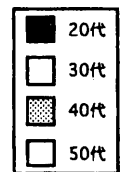
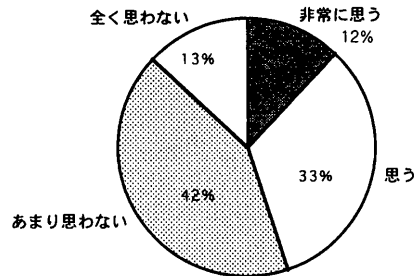
4-e,来院予定が判らなかつた



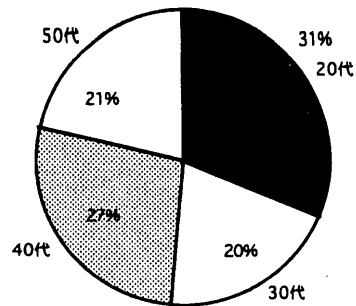
4-c,どのような業務を依頼していいかわからなかつた



4-f,ボランティア活動員への業務の依頼が判らなかつた



4-a,A群について年代別



図Ⅲ、質問4のアンケート結果